

対称群の一般バーンサイド環のユニット元

近畿大学・理工学部 小田文仁 (Fumihito Oda)*
Faculty of Science and Engineering, Kindai University
室蘭工業大学大学院・工学研究科 竹ヶ原裕元 (Yugen Takegahara)
Muroran Institute of Technology
北星学園大学・経済学部 吉田知行 (Tomoyuki Yoshida)†
Graduate School of Economics, Hokusei Gakuen University

1 はじめに

G は有限群, $C(G)$ は G のすべての部分群の族の G 共役類の集合とする. 部分群 $H \leq G$ に対し, G/H は H の G におけるすべての左剰余類 gH , ただし, $g \in G$, の集合とする. G の Burnside 環 $\Omega(G)$ は, G/H , ただし, $(H) \in C(G)$, に対応するシンボル $[G/H]$ の形式的 \mathbb{Z} 線形結合全体に

$$[G/H] \cdot [G/U] = \sum_{HgU \in [H \setminus G/U]} [G/(H \cap {}^gU)]$$

ただし, $(H), (U) \in C(G)$, ${}^gU = gUg^{-1}$, $[G/(H \cap {}^gU)] = [G/K]$, $(K) = (H \cap {}^gU) \in C(G)$, で与えられる積が定義された可換環である (たとえば, [CR81, §80], [Yo90b, §2.1] を参照). $\Omega(G)$ の単位元は $[G/G]$ である. 簡略のため $1 = [G/G]$ と書く. $\Omega(G)$ の単元群は可換 2 群 (cf. §2) であり, $\Omega(G)$ の単元の解析は非常に興味深い問題である.

S_n は n 文字の集合 $[n] = \{1, 2, \dots, n\}$ 上の対称群, \mathfrak{Y}_n は S_n の Young 部分群全体の族とする. シンボル $[S_n/Y]$, ただし, $Y \in \mathfrak{Y}_n$, の \mathbb{Z} 線形結合全体を $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ ([BBTH92] 参照) と書く. \mathfrak{Y}_n は共役と共通部分をとる操作で閉じているので, $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ は $\Omega(S_n)$ の部分環である (簡略のため, その部分環は対称群の Young 部分群に関する partial Burnside 環と呼ばれている). S_n の指標環を $R(S_n)$ と書く. このとき環同型 $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n) \cong R(S_n)$ が成立すること (たとえば, [Yo90b, Proposition 7.2] を参照), また, $R(S_n)$ の単元群が $\pm 1_{S_n}, \pm \nu_n$, ただし, 1_{S_n} は S_n の自明な指標, ν_n は交代指標である (たとえば, [Ya91] を参照), で構成されることがよく知られている. 特に, $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元群は, Klien の 4 群と同型である.

最近, [IO15] で Idei と Oda は, \mathfrak{Y}_n の包含関係 \leq に関するポセット (\mathfrak{Y}_n, \leq) の Möbius 関数 $\mu_{\mathfrak{Y}_n}$ を用いて $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の非自明な単元の公式を与えた. そのような単元は, また, $\Omega(S_n)$ の単元でもあり, $\Omega(S_n)$ の単元の何らかの特徴付けを与えているようである. しかしながら, 一般に, $\Omega(S_n)$ の単元はもっとたくさん存在する ([BP07]). 本稿の目的は, $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の非自明な単元の tom Dieck 準同型 (詳細は §2 を参照) を用いた特徴付けを与えた論文 [OTY] の要旨を報告することである. 結果的に, 我々は, その論文で $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元群が tom Dieck 準同型の像に含まれることを証明することに成功した. ν_n は, S_n 集合 S_n/Y , ただし, $Y \in \mathfrak{Y}_n$, が与える置換指標の \mathbb{Z} 線形結合として具体的に表される (cf. Theorem 4.4). それらの事実を証明するために, 任意の左 G 集合が与える置換指標の tom Dieck 準同型による像が, G ポセットの被約 Lefschetz 不変量であること, それは, 本質的に [Th87] で与えられた, がわかる.

2 tom Dieck 準同型

部分群 $H \leq G$ と有限左 G 集合 X に対し,

$$\text{inv}_H(X) = \{x \in X \mid hx = x \text{ for all } h \in H\}$$

とおく. [Di79, Proposition 1.2.2] により,

$$[G/U] \mapsto (\#\text{inv}_H(G/U))_{(H) \in C(G)}$$

* supported by JSPS KAKENHI Grant-in-Aid for Scientific Research (C) 25400003.

† supported by JSPS KAKENHI Grant-in-Aid for Scientific Research (C) 25400001.

で与えられる写像 $\varphi : \Omega(G) \rightarrow \tilde{\Omega}(G) := \prod_{(H) \in C(G)} \mathbb{Z}$, ただし, $(U) \in C(G)$, は単射環準同型であり, Burnside 準同型, または, マーク準同型と呼ばれている. 明らかに $\tilde{\Omega}(G)$ の単元群は $\prod_{(H) \in C(G)} \langle -1 \rangle$ であり, したがって, $\Omega(G)$ の単元群は基本可換 2 群である.

$R_{\mathbb{R}}(G)$ は G の実表現環, $\Omega(G)^\times$ は $\Omega(G)$ の単元群とする. 任意の元 $x \in \Omega(G)$ は, $\varphi(x) = (x_H)_{(H) \in C(G)}$ であるとき, $x = \varphi^{-1}((x_H)_{(H) \in C(G)})$ と書く. [Di79, Proposition 5.5.9] により, 任意の左 $\mathbb{R}G$ 加群 M に対し, 群準同型 $u = u_G : R_{\mathbb{R}}(G) \rightarrow \Omega(G)^\times$ で

$$M \mapsto \varphi^{-1}(((-1)^{\dim M^H})_{(H) \in C(G)})$$

ただし, M^H は M の H 不変部分空間, をみたくものが存在する.

$H \leq G$ とする. $W_G(H) = N_G(H)/H$, ただし, $N_G(H)$ は H の G における正規化群, とおく. 有限生成左 $\mathbb{C}G$ 加群 M は, \mathbb{C} 指標 χ を与えるとする. 部分群 $H \leq G$ に対し, M^H は $\mathbb{C}W_G(H)$ 加群とみなすことが可能であり, 任意の $gH \in W_G(H)$ に対し

$$\bar{\chi}(gH) = \frac{1}{|H|} \sum_{h \in H} \chi(gh)$$

で定義される $W_G(H)$ の \mathbb{C} 指標 $\bar{\chi}$ を与える (たとえば, [ACNT13, Lemma 3.1] を参照). 特に, $\dim M^H$ は, \mathbb{C} 指標 χ の H への制限 $\chi|_H$ と H の自明な指標 1_H との H における内積 $\langle \chi|_H, 1_H \rangle_H$ に等しい.

[Yo90b, Corollary 4.3] より任意の $\chi \in \bar{R}_{\mathbb{R}}(G)$ に対し

$$\bar{u}(\chi) = \sum_{(U) \in C(G)} \frac{1}{|W_G(U)|} \left(\sum_{H \leq G} \mu(U, H) (-1)^{\langle \chi|_H, 1_H \rangle_H} \right) [G/U], \quad (2.1)$$

ただし, μ は G のすべての部分群の族 $S(G)$ の包含関係 \leq に関するポセット $(S(G), \leq)$ の Möbius 関数, を得る.

Example 1. 明らかに, $\bar{u}(1_G) = -1$ が成り立つ.

Example 2. A_n は $[n]$ 上の交代群とする. $1 - [S_n/A_n]$ は $\Omega(S_n)$ の単元であり, ν_n の tom Dieck 準同型による像である.

Remark 1. G が可解でないならば, [Ma82, Theorem 5.4] により $u : R_{\mathbb{R}}(G) \rightarrow \Omega(G)^\times$ は全射ではない. 特に, $n \geq 4$ ならば $\bar{u} : \bar{R}_{\mathbb{R}}(S_n) \rightarrow \Omega(S_n)^\times$ は全射ではない: しかし, $\bar{u}_{S_2}, \bar{u}_{S_3}$ は全射である ([Ma82] を参照) ($2|\text{Im} \bar{u}_{S_4}| = |\Omega(S_4)^\times| = 2^6$ が成り立つことを注意する).

3 $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元

$R(G)$ は G の指標環とする. 左 G 集合 X が与える置換指標 π_X は, 任意の元 $g \in G$ に対し

$$\pi_X(g) = \#\{x \in X \mid gx = x\}$$

で定義される. 環準同型 $\text{char}_G : \Omega(G) \rightarrow R(G)$ を, 任意の左 G 集合に対し

$$[X] \mapsto \pi_X$$

で定める (cf. [Yo90a, §6]). [Yo90b, Proposition 7.2] により, 環準同型 $\text{char}_{S_n} : \Omega(S_n) \rightarrow R(S_n)$ は環同型写像

$$\overline{\text{char}}_{S_n} : \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n) \rightarrow R(S_n)$$

([JK81, 2.3] 参照) を誘導する. 従って, $\overline{\text{char}}_{S_n}(\alpha) = \nu_n$ を満たすただ一つの元 $\alpha \in \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ が存在する. $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元群のすべての元は, $\pm 1, \pm \alpha$ であり, また, $\Omega(S_n)$ の単元でもある.

部分群 $H \leq S_n$ に対し, Young 部分群 Y_H を, H を保存する S_n のすべての Young 部分群の共通部分として定める. n の分割 (n_1, n_2, \dots, n_r) に対応する Young 部分群 $Y \leq S_n$ は, 互いに非交和な n_i サイクル, ただし, $i = 1, 2, \dots, r$, の積 σ_Y で $Y = Y_{(\sigma_Y)}$ を満たすものを含む. 以下の補題 (cf. [Yo90b, §7.1]) を示す.

Lemma 3.1. *If $\varphi(\alpha) = (\alpha_H)_{(H) \in C(S_n)}$, then $\alpha_H = \alpha_{Y_H}$, $(H) \in C(S_n)$ and $\alpha_Y = \nu_n(\sigma_Y)$, $Y \in \mathfrak{Y}_n$, where $\sigma_Y \in S_n$ with $Y = Y_{\langle \sigma_Y \rangle}$.*

[Yo90b, Corollary 4.3] と Lemma 3.1 を用いて α は

$$\alpha = \sum_{(Y) \in C(\mathfrak{Y}_n)} \frac{1}{|W_{S_n}(Y)|} \left(\sum_{H \in \mathfrak{Y}_n} \mu_{\mathfrak{Y}_n}(Y, H) \nu_n(\sigma_H) \right) [S_n/Y], \quad (3.1)$$

ただし, $\sigma_H \in S_n$, $Y = Y_{\langle \sigma_H \rangle}$, $C(\mathfrak{Y}_n)$ は \mathfrak{Y}_n の S_n 共役類, と表される. この公式は, [IO15, Corollary 5.2] で表されている.

α が, tom Dieck 準同型像に含まれることを示す. S_n 集合 $[n]$ が与える置換指標 $\pi_{[n]}$ は, 任意の $\sigma \in S_n$ に対し,

$$\sigma \mapsto \#\{k \in [n] \mid \sigma(k) = k\}$$

として定義される. 部分群 $H \leq S_n$ に対し, $\text{Orb}_H([n])$ を $[n]$ の H -軌道とする. Cauchy-Frobenius の補題 (たとえば, [Yo90b, Lemma 2.7] 参照) により, 任意の部分群 $H \leq S_n$ に対し, $\langle \pi_{[n]}|_H, 1_H \rangle_H = \#\text{Orb}_H([n])$ である. $\chi_n = \pi_{[n]} - 1_{S_n}$ とおく. このとき, χ_n は S_n の既約 \mathbb{C} 指標であることがわかる. 明らかに, $\chi_n \in \overline{R}_{\mathbb{R}}(G)$ が成り立つ. $\Omega(S_n)$ の単元 β を

$$\varphi(\beta) = ((-1)^{\#\text{Orb}_H([n])})_{(H) \in C(S_n)} = ((-1)^{\langle \pi_{[n]}|_H, 1_H \rangle_H})_{(H) \in C(S_n)} = -((-1)^{\langle \chi_{[n]}|_H, 1_H \rangle_H})_{(H) \in C(S_n)},$$

と定めると, β は $\pi_{[n]}$ の tom Dieck 準同型による像である. $\alpha = (-1)^n \beta$ (cf. Theorem 3.4) が, Lemma 3.1 と次の補題を組み合わせる事により得られる.

Lemma 3.2. *For each $H \leq S_n$, $\#\text{Orb}_H([n]) = \#\text{Orb}_Y([n])$. In particular, for each $Y \in \mathfrak{Y}_n$, $\#\text{Orb}_Y([n]) = \#\text{Orb}_{\sigma_Y}([n])$, where $\sigma_Y \in S_n$ with $Y = Y_{\langle \sigma_Y \rangle}$.*

Lemma 3.3. *For each $\sigma \in S_n$, $(-1)^{\#\text{Orb}_{\sigma}([n])} = (-1)^n \nu_n(\sigma)$.*

以下の定理が, $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元の tom Dieck 準同型による特徴付けである.

Theorem 3.4. *The unit group of $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ is included in the image by the tom Dieck homomorphism. In particular, $\alpha = (-1)^n \beta$.*

Proof. $-1 = \overline{u}(1_{S_n})$ が成り立つから, $\alpha = (-1)^n \beta$ が成り立つことを示せば十分である. $\varphi(\alpha) = (\alpha_H)_{(H) \in C(S_n)}$ と $\varphi(\beta) = (\beta_H)_{(H) \in C(S_n)}$ が成り立つと仮定する. $\alpha_Y = (-1)^n \beta_Y$, $Y \in \mathfrak{Y}_n$, とすると Lemma 3.1 と Lemma 3.2 により任意の部分群 $H \leq S_n$ に対し $\alpha_H = (-1)^n \beta_H$ が成り立つから, $\alpha = (-1)^n \beta$ を得る. $Y \in \mathfrak{Y}_n$ とする. このとき, Lemma 3.1 より, $Y = Y_{\langle \sigma_Y \rangle}$ を満たす $\sigma_Y \in S_n$ に対し $\alpha_Y = \nu_n(\sigma_Y)$ が成り立つ. 従って Lemma 3.2 と Lemma 3.3 より

$$\alpha_Y = (-1)^{\text{Orb}_{\langle \sigma_Y \rangle}([n]) + n} = (-1)^{\text{Orb}_Y([n]) + n} = (-1)^n \beta_Y$$

が従う. □

4 The reduced Lefschetz invariant of a G -poset

Theorem 3.4 のよい応用がある. ν_n の置換指標 $\pi_{S_n/Y}$, ただし, $Y \in \mathfrak{Y}_n$, の \mathbb{Z} 線形結合としての表現は, 非明示的に等式 (3.1) で表されているが, 一方, 明示的に表す事は価値のあることである.

順序 \leq が定められた任意の有限左 G 集合 P は, \leq が G の作用で不変であるとき G ポセットと呼ばれる. P を G ポセット, $Sd_i[P]$ を基数 $i+1$ の P の元からなる鎖 $x_0 \leq x_1 \leq \dots \leq x_i$ 全体の集合とする. P の Lefschetz 不変量 Λ_P は

$$\Lambda_P = \sum_{i=0}^{\infty} (-1)^i [Sd_i(P)] \in \Omega(G),$$

P の被約 Lefschetz 不変量 $\tilde{\Lambda}_P$ は $\tilde{\Lambda}_P = \Lambda_P - 1$ と定める (cf. [Bo00], [Th87]). 有限左 G 集合 X に対し, $\overline{P}(X)$ は包含関係に関する X のすべての部分集合の G ポセットとする. $P(X)$ は G ポセット $\overline{P}(X) - \{\emptyset, X\}$

とする。このとき、部分群 $K \leq G$ に対し、 $\varphi(\tilde{\Lambda}_{P(X)})$ の (K) 成分は、 $P(X)^K (= \text{inv}_K(P(X)))$ の被約 Euler-Poincaré 標数に等しい：

$$\sum_{i=0}^{\infty} (-1)^i |Sd_i(P(X)^K)| - 1.$$

次に、本質的には [Th87, Proposition 5.1] で証明された以下の命題の組合せ論的な証明を与える。

Proposition 4.1. *Let X be a finite left G -set. The reduced Lefschetz invariant $\tilde{\Lambda}_{P(X)}$ of $P(X)$ is the image of π_X by the tom Dieck homomorphism.*

Proposition 4.1 の組合せ論的な証明のためには、以下の補題が必要である。

Lemma 4.2. *For each positive integer j , set*

$$c_j = \sum_{i=0}^j (-1)^i \sum_{(n_1, n_2, \dots, n_i) \in A(i, j)} \binom{j}{n_1, n_2, \dots, n_i},$$

where $A(i, j) = \{(n_1, n_2, \dots, n_i) \mid \sum_k n_k = j \text{ and } n_1, n_2, \dots, n_i \in \mathbb{N}\}$ and

$$\binom{j}{n_1, n_2, \dots, n_i} = \frac{j!}{n_1! n_2! \cdots n_i!} \quad (\text{multinomial coefficients}).$$

Then $c_j = (-1)^j$ for any positive integers j .

β の明示的な表現の計算に戻る (cf. 等式 (4.1)).

Corollary 4.3. *The reduced Lefschetz invariant $\tilde{\Lambda}_{P([n])}$ of $P([n])$ coincides with β .*

与えられた部分群 $H \leq G$ に対し、 H の自明な指標 1_H を G に誘導した \mathbb{C} 指標を 1_H^G と書く。 1_H^G は置換指標 $\pi_{G/H}$ と同値である。

$[n]$ の任意の置換のサイクル型 $\lambda = (1^{m_1}, \dots, n^{m_n})$ に対し、 $S_1^{(m_1)} \times \cdots \times S_n^{(m_n)}$ 、ただし、各 $S_j^{(m_j)}$ は対称群 S_j の m_j 個の直積、と同型な S_n の Young 部分群を S_λ と書く。 ν_n を $1_Y^{S_n}$ 、ただし、 $Y \in \mathfrak{Y}_n$ 、の \mathbb{Z} 線形結合として詳細に表す準備が整った。この結果は、[JK81, Theorem 2.3.15] における ν_n の表現の簡易化である。

Theorem 4.4. *The alternating character ν_n of S_n is expressed explicitly in the form*

$$\nu_n = \sum_{\lambda=(1^{m_1}, \dots, n^{m_n})} (-1)^{n+m_1+\dots+m_n} \frac{(m_1+\dots+m_n)!}{m_1! \cdots m_n!} 1_{S_\lambda}^{S_n},$$

where the sum runs over all cycle types of permutations on n -letters.

Proof. Theorem 3.4 より $\beta = (-1)^n \alpha$ が示され $\nu_n = \overline{\text{char}_{S_n}(\alpha)}$ が成り立つから、定理の主張は等式

$$((-1)^n \alpha) = \beta = \sum_{\lambda=(1^{m_1}, \dots, n^{m_n})} (-1)^{n+m_1+\dots+m_n} \frac{(m_1+\dots+m_n)!}{m_1! \cdots m_n!} [S_n/S_\lambda] \quad (4.1)$$

と同値である。 i を非負整数とする。このとき、 $[Sd_i(P([n]))] = \sum_t [O_t]$ 、ただし、 O_t は $Sd_i(P([n]))$ の S_n 軌道、となる。 S_n 軌道 O_t の任意の代表 $x_0 \leq x_1 \leq \cdots \leq x_i$ は、部分集合 $\{y_0, y_1, \dots, y_i, y_{i+1}\} \subset P([n])$ で、 $k = 0, 1, \dots, i$ に対し $x_k = \dot{\cup}_{j=0}^k y_j$ と $[n] = \dot{\cup}_{j=0}^{i+1} y_j$ を満たすもの、— それは、 $\ell = 1, \dots, n$ に対し、 $m_\ell = \#\{k \mid y_k = \ell\}$ を満たすサイクル型 $(1^{m_1}, \dots, n^{m_n})$ に対応する — を定める。逆に、 $\lambda = (1^{m_1}, \dots, n^{m_n})$ が、 $\sum_\ell m_\ell = i + 2 \geq 2$ を満たす $[n]$ の置換のサイクル型であるならば、 $Sd_i(P([n]))$ の

$$\frac{(m_1 + \cdots + m_n)!}{m_1! \cdots m_n!}$$

個の S_n 軌道、それは、 S_n/S_λ と同型な S_n 集合である、を構成することができる。ゆえに、等式 (4.1) は Corollary 4.3 より従う。 \square

Remark 2. Frobenius の相互律 (たとえば, [CR81, (10.9)] 参照) により, 任意の部分群 $H \leq G$ に対し, $\langle 1_H^G, 1_G \rangle_G = \langle 1_H, 1_H \rangle_H = 1$ を得る. Theorem 4.4 から, 等式

$$\sum_{\lambda=(1^{m_1}, \dots, n^{m_n})} (-1)^{m_1+\dots+m_n} \frac{(m_1+\dots+m_n)!}{m_1! \cdots m_n!} = (-1)^n \langle \nu_n, 1_{S_n} \rangle_{S_n} = 0$$

が従う.

Example 3. 等式 (4.1) により, $G = S_n$ かつ $\chi = \pi_{[n]}$ のとき, 等式 (2.1) の $[S_n/U]$ の係数と等式 (3.1) における $[S_n/Y]$ の係数は完全に決定される. $n = 3$ のときは,

$$\alpha = [S_3/S_{(1^3)}] - 2[S_3/S_{(1^1, 2^1)}] + [S_3/S_{(3^1)}].$$

([JK81, pp. 41–42 and Theorem 2.3.15] も参照). $n = 4$ のときは,

$$\alpha = [S_4/S_{(1^4)}] - 3[S_4/S_{(1^2, 2^1)}] + [S_4/S_{(2^2)}] + 2[S_4/S_{(1^1, 3^1)}] - [S_4/S_{(4^1)}]$$

が成り立つ.

5 Concluding remarks

e が, $2e \in \mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ を満たす $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ のべき等元であるならば, $1 - 2e$ と $-1 + 2e$ は $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元である. α は $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ の単元だから $(1 - \alpha)/2$ は $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ のべき等元である. しかし, $(1_{S_n} - \nu_n)/2 \notin R(S_n)$ だから, $(1 - \alpha)/2 \notin \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ である. したがって, 以下の命題を得る.

Proposition 5.1. *The idempotents of $\Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ are only $0, 1$.*

Proposition 5.1 の S_n 集合を用いた *Proof* はどうなるだろうか? もちろん, 等式 (4.1) において, $[S_n/S_{(1^n)}]$ の係数はいつでも $(-1)^n$ だから, $(1 - \alpha)/2 \notin \Omega(S_n, \mathfrak{Y}_n)$ である. この事実は, Theorem 3.4 の結論でもある. なぜなら, それは [Ma82, (5.4.1)] — e が非自明なべき等元, すなわち, $e \neq 0, 1$ である $\Omega(S_n)$ のべき等元, ならば, 単元 $1 - 2e$ は tom Dieck 準同型による像には含まれない — から従うからである.

以下の補題は, [Yo90a, Lemma 2.1] (また, [Di79, Proposition 1.3.5] 参照) であり, [Yo90a] において tom Dieck 準同型の存在性の証明に用いられた.

Lemma 5.2. *An element $(x_H)_{(H) \in C(G)}$ of $\tilde{\Omega}(G)$ is included in the image $\text{Im} \varphi$ by the Burnside homomorphism if and only if*

$$\sum_{gU \in W_G(U)} x_{\langle g \rangle U} \equiv 0 \pmod{|W_G(U)|}$$

for all $(U) \in C(G)$.

$(1 - \alpha)/2 \notin \Omega(S_n)$ の直接的な証明を与えてこの報告を終える.

Proof of Proposition 5.1 $\varphi(\alpha) = (\alpha_H)_{(H) \in C(G)}$ とする. Lemma 3.3 および Theorem 3.4 (あるいは, α の定義) より

$$\sum_{\sigma \in S_n} \frac{1 - \alpha_{\langle \sigma \rangle}}{2} = \sum_{\sigma \in S_n} \frac{1 - \nu_n(\sigma)}{2} = |A_n| \not\equiv 0 \pmod{|S_n|},$$

ここで, σ が $\tau \in S_n$ と共役で $(\langle \tau \rangle) \in C(G)$ を満たすならば, $\alpha_{\langle \sigma \rangle} = \alpha_{\langle \tau \rangle}$ である, が成り立つ. これと, Lemma 5.2 は, $((1 - \alpha_H)/2)_{(H) \in C(S_n)} \notin \text{Im} \varphi$ を示す. ゆえに, $(1 - \alpha)/2 \notin \Omega(S_n)$ を得る. \square

参考文献

- [ACNT13] Asai, T.; Chigira, N.; Niwasaki, T.; Takegahara, Y.: *On a theorem of P. Hall*, J. Group Theory **16** (2013), 69–80.
 [BBTH92] Bergeron, F.; Bergeron, N.; Howlett, R.B.; Taylor, D.E.: *A Decomposition of the Descent Algebra of a Finite Coxeter Group*, J. Algebraic Combinatorics **1** (1992) 23–44.

- [BP07] Boltje, R.; Pfeiffer, G.: *An algorithm for the unit group of the Burnside ring of a finite group* In: Groups St. Andrews 2005. Vol. 1. Cambridge: Cambridge Univ. Press (2007).
- [Bo00] Bouc, S.: Burnside rings, Handbook of algebra, **2**, 739–804, North-Holland, Amsterdam, 2000.
- [CR81] Curtis, C.W.; Reiner, I.: Methods of Representation Theory, **I**, **II**, Wiley- Interscience, New York, 1981, 1987.
- [Di79] tom Dieck, T.: Transformation Groups and Representation Theory, Lecture Notes in Mathematics, **766**, Springer, Berlin, 1979.
- [IO15] Idei, H.; Oda, F.: *The table of marks, the Kostka matrix, and the character table of the symmetric group*, J. Algebra **429** (2015), 318–323.
- [JK81] James, G.D.; Kerber, A.: The Representation Theory of the Symmetric Group, Encyclopedia of mathematics and its applications, **16**, Addison–Wesley, Reading, MA, 1981.
- [Ma82] Matsuda, T.: *On the unit groups of Burnside rings*, Japan. J. Math. (N.S.) **8** (1982), 71–93.
- [OTY] Oda, F.; Takegahara, Y.; Yoshida, T.: *The units of a partial Burnside ring relative to the Young subgroups of a symmetric group*, submitted.
- [Th87] Thévenaz, J.: *Permutation representations arising from simplicial complexes*, J. Combin. Theory Ser. A **46** (1987), 121–155.
- [Ya91] Yamauchi, K.: *On the units in a character ring*, Hokkaido Math. J. **20** (1991), 477–479.
- [Yo90a] Yoshida, T.: *On the unit groups of Burnside rings*. J. Math. Soc. Japan **42** (1990) no. 1, 31–64.
- [Yo90b] Yoshida, T.: *The generalized Burnside ring of a finite group*, Hokkaido Math. J. **19** (1990), 509–574.